

桜峯(1)遺跡発掘調査概報

- 国道103号横内バイパス道路改良工事事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 -



平成8年度

青森市教育委員会

序

先年からの縄文ブーム以来、市民の埋蔵文化財に対する意識、関心は高まりを見せております。

そのようななか、青森市教育委員会では国道103号横内バイパス道路改良工事に係る埋蔵文化財包蔵地、桜峯（1）遺跡の発掘調査を平成6年度から継続して実施してまいりました。

今年度の調査においても竪穴式住居跡や土坑群等、縄文時代の集落跡の一部を検出したしております。

その調査成果について昨年度に引き続き、図版等を多用し、より親しみやすい発掘調査概報として刊行することにいたしました。研究者はもとより市民の皆様におかれましても、文化財の保護・活用、歴史学習等にいささかでも役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査員、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である青森県土木部のご理解に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

青森市教育委員会

教育長 池田 敬

例 言

目次

1. 本書は、青森市教育委員会が平成8年度に実施した国道103号横内バイパス道路改良工事に係る桜峯（1）遺跡発掘調査の概報である。
2. 桜峯（1）遺跡の遺跡番号は01207である。
3. 本書は概要報告書であり、調査全体の報告については平成9年度調査報告書を刊行する予定である。
4. 本書の執筆は、調査担当者である小野貴之、沼宮内陽一郎が分担しておこなった。
5. 調査の実施にあたって次の機関からご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。
青森県教育庁文化課・奈良教育大学・八戸工業大学・南部二区連合町会・南部四区連合町会

序	
例言	
目次	
はじめに	1
調査要項	2
遺跡の環境	4
今年度の調査から	7
検出した遺構	8
出土した遺物	13
まとめ	16

はじめに

青森市の中央を南北に走る国道103号は、西側の県道荒川・青森停車場線と共に、買い物や通勤、通学等、青森市民の生活にとって利用度が高く、青森市から秋田県大館市に至る経路としては、八甲田や十和田湖を通過するため、市民のみならず他地域の人々にとっては観光ルートとしての重要な路線となっています。

しかし、現路線のなかでも市街地から野木・雲谷・幸畑へと分岐する通称「横内十文字」においては、朝夕に交通渋滞を引き起こし、通勤、通学に不便な状況となっています。

そのため青森県土木部では、交通渋滞の解消や、平成5年に開学した青森公立大学へ向かうアクセスの利便性の向上を図るため、国道103号横内バイパス建設を計画しました。しかし、建設予定地内には、桜峯(1)・(2)遺跡の二つの遺跡が所在していることが判明したことから、その対応について県土木部が県文化課と協議した結果、記録保存を前提とした遺跡の発掘調査が必要となり、遺跡所在地の管轄である青森市教育委員会に調査が依頼されました。

青森市教育委員会では、埋蔵文化財の保護と開発事業との円滑な調整を図るため、青森県土木部よりの調査依頼を受諾し、平成6年度から工事予定地内に所在する桜峯(1)遺跡と桜峯(2)遺跡の記録保存を前提とした発掘調査を実施し、桜峯(1)遺跡については平成7年度以降も継続して調査を実施してきました。

桜峯(1)遺跡の平成7年度の調査では、竪穴式住居跡1軒、土坑30基、埋設土器遺構8基、溝状遺構条等の遺構を検出し、土器や石器等の遺物についてはダンボール箱約30箱分が出土しました。

平成8年度も桜峯(1)遺跡の調査対象範囲の未調査部分について8,200㎡を対象として5月13日から10月25日までの期間に渡り、調査を実施しました。



発掘作業風景

調 査 要 項

1. 調査目的

国道103号道路改良工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

桜峯(1)遺跡

青森市大字横内字桜峯ほか

3. 事業実施期間

平成8年4月8日～平成9年3月25日

(発掘調査期間 平成8年5月13日～平成8年10月25日)

4. 調査対象面積

8,200 m²

5. 調査委託者

青森県土木部

6. 調査受託者

青森市教育委員会

7. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

8. 調査協力機関

青森県教育庁文化課

9. 調査体制

調査指導員	村 越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	(考古学)
調 査 員	高 島 成 侑	八戸工業大学教授	(建築史学)
"	市 川 金 丸	青森県考古学会会長	(考古学)
"	赤 沼 英 男	岩手県立博物館主任専門学芸員	(保存科学)
"	工 藤 一 彌	青森県教育センター指導主事	(地質学)
"	長 崎 勝 巳	青森市立長島小学校教諭	(考古学)
"	徳 差 義 男	青森市立浪打小学校教諭	(考古学)
調査協力員	今 正 秀	南部二区連合町会長	
"	白 鳥 弘 明	南部四区連合町会長	

調査事務局 青森市教育委員会

教 育 長	池 田 敬
生涯学習部長	永 井 勇 司
社会教育課長	山 田 章
埋蔵文化財対策室長	遠 藤 正 夫
室 長 補 佐	福 士 敦
埋蔵文化財係長	石 岡 義 文
主 事	田 澤 淳 逸
〃	小 野 貴 之 (調査担当)
〃	木 村 淳 一
〃	児 玉 大 成
〃	沼宮内 陽一郎 (調査担当)
〃	設 楽 政 健



遺構集中地区

遺 跡 の 環 境

青森市は、青森県の中央部に位置しており、北の陸奥湾、南の八甲田連峰と、海と山に囲まれた街で、その面積は 693.47 km²です。

地形から見た青森市は、大きく四つの地域に分かれます。中心部は、複数の河川によって形成された青森平野が位置しています。西部は、緩やかな丘陵部となっており、中心部の青森平野とは、青森市西部を南北に走る「入内断層」によって分かれています。東部は、奥羽山脈の延長部に相当する東岳を中心とした侵食の進んだ山地です。南から南東部は、八甲田カルデラの噴火の堆積物によって形成された、緩やかな火山性の台地です。この台地は、横内川、合子沢川などによる深い谷によって、いくつかの小丘陵に分けられています。

桜峯(1)遺跡は、青森公立大学から国道103号を約1km市街地を下った付近、八甲田火山性台地の標高100m～120mの丘陵上に位置しています。標高120m付近の調査区南西部は平坦な台地となっており、そこから115m付近にかけて北西に緩やかに傾斜しています。調査区の標高110m付近には平坦部分があり、全体として北西に向かう傾斜のなかで、台地が少し西へ突き出しており、突き出し部の南側の沢と北側の沢とに挟まれています。北側の沢から緩く立ち上がる斜面をへて、調査区北端の標高100m付近からは急傾斜な沢となっています。

調査区の発掘調査前の土地利用状況は、大半が近代に植林された林で、一部は、以前に果樹園や畑地だったと思われ、原野となっていました。調査区の中央部、標高115m付近から北側では、一度重機等による削平の後、盛土等を行った痕跡を所々で確認しました。



発掘調査前風景（遺構集中地区）



桜峯(1)遺跡調査対象区

周辺の遺跡

青森市では、平成9年3月現在、286ヶ所の遺跡が確認されており、桜峯(1)遺跡の周辺にもさまざまな時期の遺跡が所在しています。

桜峯(1)遺跡のすぐ東側には、縄文時代前期から後期にかけての鏡山遺跡が所在しています。

鏡山遺跡から横内川の流れる沢をひとつ隔てた台地上には四ツ石遺跡、四ツ石(2)・(3)遺跡、田茂木野遺跡が所在しています。いずれも縄文時代の遺跡です。

桜峯(1)遺跡の北西約1kmには、桜峯(1)遺跡と同時に調査が行われた、桜峯(2)遺跡が所在しています。調査の結果、集落跡の一部を検出し、フラスコ状の土坑群の一部では底面から赤色顔料が出土しており、墓としての利用をうかがわせます。

さらに北西には、横内遺跡、横内(2)遺跡などが所在し、発掘調査の結果、縄文時代前期の住居跡や土坑群を検出しています。

桜峯(1)遺跡の西側には、縄文時代前期から後期にかけての山口遺跡や、平安時代の住居跡が多数検出された、野木遺跡、新町野道跡が所在しています。

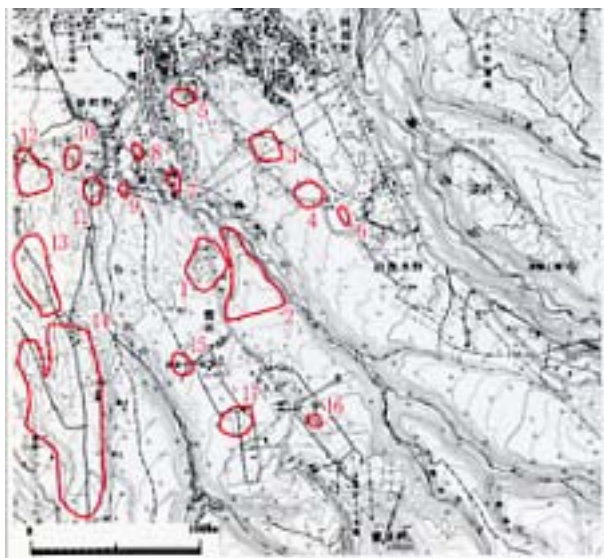
桜峯(1)遺跡の南側には、標高150m付近に雲谷山崎遺跡、標高200m付近の雲谷山吹(1)・(2)遺跡と三つの遺跡が所在し、いずれも縄文時代の遺跡であることが確認されています。



桜峯(2)遺跡 フラスコ状土坑



横内遺跡 テラスを持つ竪穴式住居跡



周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代
1	桜峯(1)	縄文(前・中・後・晩)
2	鏡山	縄文(前・中・後)
3	四ツ石	縄文(後)
4	四ツ石(2)	縄文(中・後)
5	四ツ石(3)	縄文
6	田茂木野	縄文(晩)
7	桜峯(2)	縄文(前・中・後)
8	横内	縄文(前・中)
9	横内(2)	縄文(前・中)、平安
10	合子沢松森(1)	縄文
11	合子沢松森(2)	平安
12	新町野	縄文(早・前・中・後)
13	野木	縄文、平安
14	山口	縄文(前・中・後)
15	雲谷山崎	縄文
16	雲谷山吹(1)	縄文(後)
17	雲谷山吹(2)	縄文

今年度の調査から

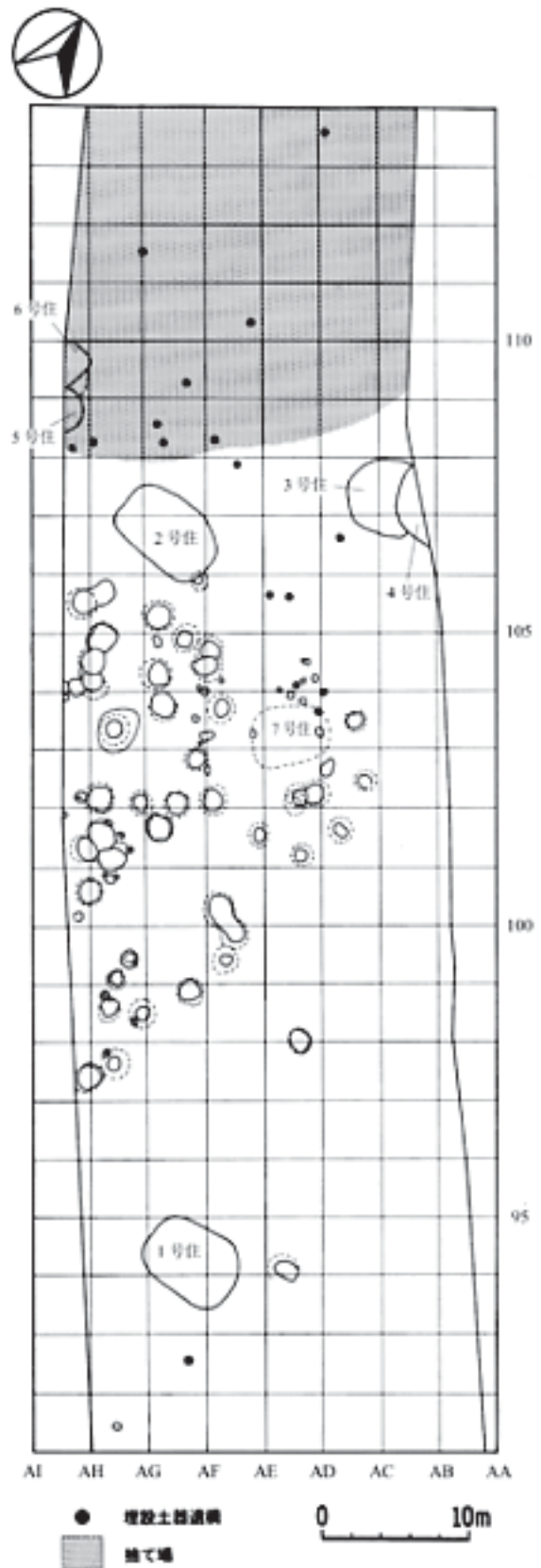
今年度は、5月13日から10月25日まで約6カ月間調査を行いました。調査対象面積は8,200m²です。調査の結果、今からおよそ5,000年前(縄文時代前期末から中期初頭)に作られたと思われる、竪穴式住居跡6軒、土坑27基、埋設土器遺構9基などの遺構を検出しました。これらの遺構は、調査区の中央部にあたる、二つの緩やかな沢に挟まれた小さい台地上に作られています。

調査区は、昨年度の調査区に隣接し、遺構配置図を見ると二ケ年に渡って検出した遺構は一ヶ所に集中していることがわかります。二ケ年での遺構数の合計は、竪穴式住居跡7軒、土坑57基、埋設土器遺構17基となります。各遺構は種類別にまとまっています。

遺構集中地区の北側は、緩やかに下る沢状の地形になっており、斜面からは土器や石器がまとまって出土しました。出土遺物の約8割がこの斜面で出土しており、縄文時代前期末から中期初頭にかけてのものです。その量は、段ボール箱で約40箱になります。小規模ではあるものの「捨て場」と思われます。出土土器は、縄文時代前期末から中期初頭のものがほとんどですが、他の時期のものもごくわずか出土しています。

各遺構は、一部が重複しており、遺構の中から出土する土器には時期差が見られることから、すべて同時期に存在したものとは思われません。また、捨て場の出土土器にも時期差があり、当時の人々が、ある程度の期間に渡ってこの台地上で生活を営んでいたことがわかります。

調査区の南側の平坦な部分からは、土坑を1基検出しました。出土遺物は、他の地区と比較して、縄文時代後期の遺物の出土が目立ちました。昨年度の調査では、付近から同じく後期の土坑を検出しており、調査区外の西や南には、他にもまだ遺構等が眠っている可能性があります。



遺構集中地区 遺構配置図

検出した遺構

竪穴式住居跡

今年度の調査では、遺構集中地区の土坑群の北側で、竪穴式住居跡6軒を検出しました。昨年度、土坑群の南側で検出した第1号住居跡と合わせて計7軒になります。調査区端に位置するものや重複しているものが多いなかで、第2号住居跡が平面形、柱穴配置等、全容を把握できる唯一のものです。

第2号住居跡は、土坑群と埋設土器遺構群の間にほぼ東西を長軸として位置しています。人為的に埋め戻されており、確認した段階でロームが広く堆積していました。住居跡の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸が約7.5m、短軸4.5m、探さ70cm、面積約27㎡です。柱跡と思われる穴が、長軸を対称として両側に3本ずつ位置しています。柱穴の規模が比較的大きいことと配列から支柱穴と思われます。その他いくつかのピットを検出していますが、住居跡の東側にある口径約30cmのピットは、2基の小ピットを両脇に付随しており、何らかの特殊施設と思われます。住居跡の床の中央部には、少し地面を掘りくぼめた炉の跡があります。壁際では、幅・深さともに10cm前後の壁溝を検出しており、溝の底部には、径10cmほどの小さい穴が作られています。壁用の杭を打ったものと考えられます。

第3号住居跡は、第4号住居跡と重複しており、規模等は明らかではありません。平面形は、楕円形と推察されます。規模は、短軸が2.4mで、検出した床面積は約13㎡です。斜面に作られており、高い側の深さは約40cmです。床から支柱穴と思われる穴を4本検出しています。中央部には、土器埋設炉があり、穴を掘り込み、口の部分を欠いた土器が埋設され、土器の周囲には焼土がみられました。床は粘土で貼床されており、貼床の下には、土器が2個埋められていました。壁際の一部では幅10cm弱の壁溝を検出しています。



第2号竪穴式住居跡

第4号住居跡は、調査区東端に位置し、平面形、規模等は不明です。壁際には幅15cmほどの壁溝を検出しています。第3号住居跡と一部が重複しており、出土土器にも時間差が考えられ、より新しいものです。

第5号住居跡は、調査区西端に位置し、規模等は不明です。第6号住居跡と重複しています。重複関係から第6号住居跡より古いものと思われます。柱穴と思われる穴を1本検出しています。

第6号住居跡は、調査区西端に位置し、規模等は不明です。柱穴と思われる穴を3本検出しています。その他に床には、口径約40cmの柱穴ではない穴が作られ周囲に粘土を貼っていた痕跡が見られます。第2号住居跡に見られるような、特殊施設と思われます。埋め戻されている土からは、他の住居跡と比較して多量の土器が出土しました。

第7号住居跡は、上部が削平を受けているため、壁は検出できませんでしたが、貼床と地面を掘り込んだ炉跡を検出し、住居跡として扱っています。検出部分とその付近には多数の穴があり、その中には配置は不明確であるものの支柱穴と考えられる規模の穴があり、この遺構の一部に伴うものである可能性があります。

これら、検出した住居跡の多くは、台地の平坦な面から斜面にさしかかるあたりに作られています。7ページの遺構配置図を見ると、昨年度検出した住居跡1軒と合わせて、計7軒検出した住居跡は、遺構の集中する台地上で、中央に集中する土坑群を取り囲むように位置しています。

完全な形で検出した住居跡は2軒のみですが、全体的に住居跡の長軸は、東西方向を基本としているように思われました。



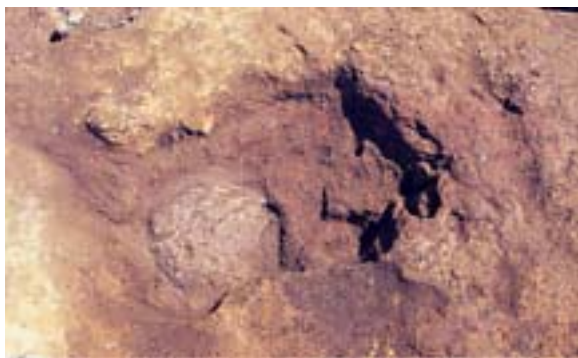
第3号(右)、第4号(左) 竪穴式住居跡



第3号住居跡 貼床下の埋設土器



第6号住居跡 遺物出土状況



第7号住居跡 炉跡

土 坑

今年度の調査では、土坑を27基検出しており、そのうち26基は、調査区中央の遺構集中地区で検出しました。遺構集中地区の26基のうち17基は、口が狭く底が広い形をしています。理科の実験で使うフラスコに断面形が似ていることから、フラスコ状土坑といわれるものです。17基のフラスコ状土坑のうち1基は、底面をさらに掘りこみ、もう一つフラスコ状土坑を作っている「子持ちフラスコ(二重フラスコ)」でした。

遺構集中地区では、昨年度の調査でも土坑群を検出しており、2カ年の合計で、土坑を53基、うちフラスコ状土坑38基を検出したこととなります。

土坑の規模は、平均で口径140cm、底径165cm、深さ93cm、フラスコ状土坑のみでは口径140cm、底径176cm、深さ108cmです。

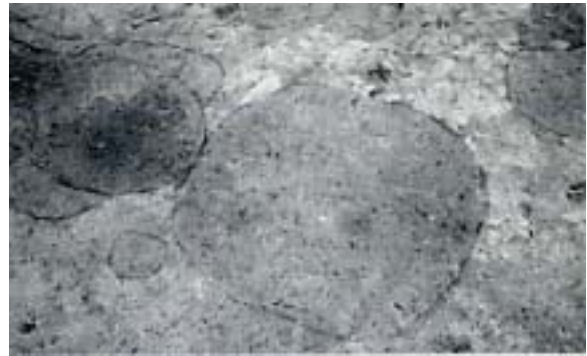
土坑の中の土は、人為的に埋め戻されたと思われるものが多く、それらには焼土や炭化物、ロームなどが層をなして入っていました。

土坑の中からは、土器や石器などの遺物も出土しています。土器は破片がほとんどですが、一個体分の破片がまとまって出土したものもありました。

一部の土坑では、口の付近に1、2基、口径20～30cm、深さ30cmほどの規模の穴を検出しており、土坑に付属する柱穴など、土坑の用途に関係があるものかも知れません。

他の遺跡では、土坑の中で人骨を検出した例や植物の実が堆積していた例があります。桜峯(1)遺跡では、そのような土坑の用途について明確に判断できるような遺物の出土はありませんが、一般的には食料を保存する貯蔵穴や墓穴としての用途などが考えられます。

調査区の南端では、1基の土坑を確認しています。調査区端のため全容は明らかではありませんが、平面形は円形か楕円形と推察されます。時期不明ですが、底部で土器片が1片出土しました。



土坑確認



子持ちフラスコ



遺物出土状況



土坑完掘

埋設土器遺構

縄文時代には、地面を掘り込み、掘った穴の中へ土器を埋設する埋設土器遺構といわれる遺構があります。

昨年度の調査では、埋設土器遺構を8基検出しており、今年度の調査では、埋設土器遺構の可能性のあるものも含めて、9基を検出しました。

それらは、遺構集中地区北側の平坦な面から捨て場へ向かう緩やかな斜面にかけて集中して埋設されており、そのうち北側の埋設土器3基は捨て場の中から検出しました。

埋設されていた土器の時期は、縄文時代前期末から中期初頭に位置づけられます。

埋設されていた土器は正立しており、倒立して埋設されていた土器はありませんでした。

他の遺跡の検出例では、土器の底部近くに穴を開けていたり、土器の内部に石を入れている例があり、桜峯(1)遺跡でも昨年度の調査で検出した埋設土器に同様な例がみられましたが、今年度の調査では、そのような埋設土器の検出はありませんでした。

埋設土器遺構は、他の遺跡からは胎児の骨の出土例があり、子供のお墓と考えられていますが、本遺跡では骨や骨粉の出土はありませんでした。



埋設土器(2号埋設)



埋設土器(9号埋設)



埋設土器(復元個体)

捨て場

遺構集中地区から北へ向かう緩やかな斜面から、土器片や石器が数多く出土しました。この斜面は土器や石器などの、当時の「捨て場」と思われます。

この捨て場は、昨年度の調査で斜面の上側を調査しており、今年度は斜面の下側を調査しました。縄文時代前期末から中期初頭にかけての土器片が、斜面全体に散乱して出土し、所々に同じ個体と思われる破片が、点在していました。また、剥片（石器を作ったときにできる“クズ”）や、磨石や敲石などの河原石を使った礫石器も出土しました。

そのほか土器や石器以外の遺物としては、土器片を利用し、その周囲を磨り、円形に形作った円盤状土製品や、縄文時代中期初頭と思われる板状土偶の一部が出土しました。

検出した捨て場の規模は、南北11～13m、東西28m、面積は約220㎡です。青森市に所在するほかの遺跡で見られる捨て場と比較すると、遺物の出土量など、それほど大きな規模の捨て場ではないようですが、調査区西側の境界まで土器片が出土していることや、調査区の西側の畑でも土器が見られることから考えると、捨て場の西側への広がりが予想されます。

調査区内から出土した土器のほとんどが捨て場と遺構集中地区からの出土で、捨て場から出土した遺物の量は、昨年度と今年度の全体の約8割に相当します。このことから当時の人々は、自分たちの住んでいるエリアの使い分けをしていたと思われます。

また、子供のお墓と考えられる埋設土器遺構の多くが捨て場から検出されていることから、縄文時代における「捨て場」は、現在わたしたちの想像するようなゴミ捨て場とは違う意味を持っていたと考えることができます。



土器出土状況



捨て場の様子

出土した遺物

土 器

今年度の調査では、段ボールで約30箱の土器が出土しています。そのうち約25箱の土器が、調査区中央の遺構集中地区北側の「捨て場」で出土しており、各個体は、ブロック状にまとまって出土しています。それ以外の調査区では、ほとんどが小破片で散在して出土しました。出土土器の9割以上が今から約5,000年前の縄文時代前期末から中期初頭のもので、他には、それより新しい中期中葉(約4,500年前)後期前葉から中葉にかけて(約4,000年前から3,500年前)の土器や平安時代の土師器や須恵器がわずかに出土しています。

桜峯(1)遺跡出土土器の大半を占める縄文時代前期末から中期初頭にかけての土器は、基本的にバケツを少し上下に細長くした様な形をしています。一部には台の付いたものや、ワイングラスの様な形をしたものがあります。土器は、粘土紐を積み上げて形作っており、粘土には、植物の繊維を混入した跡があります。縄を撚ったものや縄を棒に巻き付けたものを土器の表面に回転させたり、押し付けたりして模様をつけており、土器の口の部分と胴の部分では模様が分かります。時代が新しくなるにつれ、口の部分が湾曲して開き、把手や粘土紐の装飾がつけられるなどの変化がみられます。



縄文時代前期の土器



縄文時代中期の土器



桜峯(1)遺跡出土土器

他の地域からの影響なのか、東北北部ではあまり見られない模様をつけた土器片も一緒に出土しました。このような土器の存在は、当時の広い交易を想定させるものと言えます。

土器は、基本的に煮炊きや貯蔵などに使われたと思われ、内面に使用の痕跡が認められるものがあります。その他、炉に使用されるもの、子供のお墓と考えられる埋設土器遺構に土器棺として使われているものなどがあります。



他の地域の影響を受けた土器

土製品

今年度の調査では、土偶・円盤状土製品・ミニチュア土器などの土製品がわずかですが出土しました。土器同様、縄文時代前期末から中期初頭にかけてのものと思われる。

板状土偶の一部が1点、捨て場から出土しています。脚部もしくは腕部と思われる。厚さは3cmほどで表裏に模様がつけられています。

他の遺跡の調査例では、土偶は、完全な形で出土することは少なく、他の部分が離れた地点から出土することがあるようです。本遺跡出土土偶の残部も調査区外に眠っているのでしょうか。儀式、お祭りなどに使われたときのものかも知れません。

円盤状土製品は、4点出土しています。土器片を打ち欠いて円い形を作り出しているものと、その後で周囲を磨っているもの、さらに円の中心に穴を開けているものがあります。円形の他に三角形に土器片を打ち欠き周囲を磨っているものが1点出土しました。

ミニチュア土器は3点出土しています。粘土紐を積み上げて作った土器と違い、手づくねで形作っています。おちょこ程の大きさと思われ、一部は底に小さい台がついています。



縄文時代後期の土器



板状土偶の一部



円盤状土製品

石 器

今年度の調査では、狩猟に使われた石器、加工・調理のための道具としての機能をもつ石器、木を切ったり土を掘るなどの作業に使われたと思われる石器などが出土しました。

狩猟には石鏃・石槍が使われていました。石槍の調査区内からの出土は、昨年度に1点出土したのみでした。

全体として出土した石器には、素材となる剥片に刃部を作り出しただけの簡単な石器が目立つのですが、石鏃や石槍だけは、すべて丁寧に形作られていました。食料を得るための石鏃や石槍などは、当時の人々にとって大切な石器だったと思われ、命中率を高めたり遠くまで飛ばすための工夫をしていたと考えられます。当時、桜峯(1)遺跡で生活を営んでいた人々は、これらの石器を使って野山を駆け巡り、狩りを行っていたのでしょう。

縄文時代の人々は、皮や肉を切るため石匙(つまみつきナイフ)・石篋・スクレイパー(刃部を作り出し、刃物として使われた石器)を、木の実(クリやクルミなどの堅果類)をたたいたりすりつぶして製粉するために、たたき石・磨石・石皿などを使い分けていました。

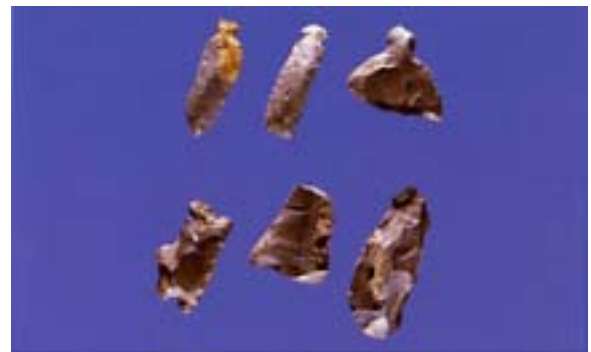
縄文時代の人々は、木を加工した道具も使っていたと思われ、三内丸山遺跡では加工した痕跡のある木製品が出土しています。桜峯(1)遺跡からは木製品は出土していませんが、出土量はそれほど多くはないものの、木を切ったり削ったりするために使った磨製石斧が出土しています。

また、この時期に多くみられる半円状偏平打製石器も出土しています。

二カ年にわたる調査の結果、出土した石器の大部分は、遺構集中地区と捨て場からの出土でした。日常生活で使われる石器がほとんどで、祭祀に関係したと思われる石器は出土しませんでした。



石鏃



石匙・石篋・スクレイパー



礫石器



磨製石斧・半円状偏平打製石器

ま と め

桜峯(1)遺跡は、縄文時代前期末から中期初頭の時期の集落跡で、今年度の発掘調査では、竪穴式住居跡6軒、フラスコ状土坑17基を含む土坑27基、埋設土器遺構9基等の遺構を検出しました。それらは、調査区南西部で検出した土坑1基を除いて、調査区中央部の西に張りした小台地上、及びその周囲に位置しています。昨年度の調査で検出した遺構も、調査区の他の地区で検出した3基の土坑を除き、同じ小台地上に集中していました。これまでの調査においてこの地点で検出した遺構の合計は、竪穴式住居跡7軒、フラスコ状土坑38基を含む土坑53基、埋設土器遺構17基となります。また、この台地は北側と南側で二つの沢に挟まれており、北側の沢に下る斜面からは、全出土遺物の約8割に相当する土器や石器等の遺物が出土しました。自然地形を利用した捨て場と思われます。

遺構には、同じ地点に作り続けたため、一部重複がみられ、出土遺物については時期幅を持つことから、この場所における生活は、ある程度の時期に渡る継続性を持つものであったと考えられます。

巨視的にみると遺構の配置からは、さらにその種類ごとにまとまりを見せる傾向を読み取ることができ、各遺構や捨て場など、秩序、ルールのもとに集落が作られ、継続して生活を営んでいたことがうかがえます。集落の範囲は、調査区外の西の畑地に多量の土器片が確認できることや、一部未検出の遺構が調査区外の東と西に伸びていることから、台地の調査区外、特に西側へ広がることが推測できます。

遺構集中地区以外の調査区は、遺物の出土量が少なく、土器については、小破片で付近に同じ個体も存在しないことから、集落の縁辺部分にあたる考えられます。ただし、調査区南部は、縄文時代後期と思われる土器等の遺物の出土が他の調査区と比較してより多く、付近で4基検出した土坑のうち時期を把握できる1基が同じく後期と考えられることなどから、調査区外西側方向には、この時期の集落跡が存在する可能性が高いと推察できます。

平成6年度から継続して実施してきた桜峯(1)遺跡の発掘調査は、今年度で調査対象範囲のすべてを終了しました。



作業風景

ふりがな	さくらみねかつこいちいせきはくつちょうさがいほう							
書名	桜峯(1)遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	小野 貴之・沼宮内 陽一郎							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL0177-34-1111							
発行年月日	西暦 1997年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらみね 桜峯(1)	あおもつみあおもつみ 青森県青森市 よこうちあざさくらみね 横内字桜峯ほか	02201	01207	40° 45 20	140° 46 37	19960513 ~ 19961025	8,200	国道103号 横内バイパス 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桜峯(1)	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 6軒	土坑 27基	埋設土器遺構 9基	縄文土器 石器		

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962 『三内壺園遺跡調査概報』	第19集	1993 『市内遺跡発掘調査報告書』
"	2	1965 『四ツ石遺跡調査概報』	第20集	1994 『小牧野遺跡発掘調査概報』
"	3	1967 『玉清水遺跡調査概報』	第21集	1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』	第22集	1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』
"	5	1971 『野木和遺跡調査報告書』	第23集	1994 『三内丸山(2)遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
"	6	1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	第24集	1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
"	7	1971 『大浦遺跡調査報告書』	第25集	1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	8	1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』	第26集	1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
		1979 『螢沢遺跡』	第27集	1996 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
		1983 『四戸橋遺跡調査報告書』	第28集	1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983 『山野峠遺跡』	第29集	1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"		1985 『長森遺跡発掘調査報告書』	第30集	1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"		1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	第31集	1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"		1986 『横内城遺跡発掘調査報告書』	第32集	1997 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
"		1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	第33集	1997 『新町野遺跡試掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第16集		1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	第34集	1997 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
"	第17集	1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	第35集	1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第18集	1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』		

青森市埋蔵文化財調査報告書第 32 集
桜峯(1)遺跡詳細分布調査概報

発行年月日 平成 9 年 3 月 25 日
発行 青森市教育委員会

〒030 青森市中央一丁目 22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030 青森市合浦一丁目 2 - 12

TEL 0177 - 42 - 2221